博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　前田　和泉

学位申請者　佐藤 貴之

論　文　名　同伴者作家B・ピリニャーク作品の革命表象に関する研究
——文明の黄昏に咲いたロシア文化の花——

【審査結果】

本論文は、革命期ロシアの作家 B. ピリニャークについて、その作品世界の中心である「始原力（スチヒーヤ）」に着目しながら、彼の挑戦と葛藤と挫折を描き出している。1917年のロシア革命は作家ピリニャークを大きく変貌させるが、1920年代後半、次第に文化統制が強まり「鋼鉄のロシア」へと突き進んでいく社会情勢の中で、彼は振り子のように「機械」と「狼」の間で揺れ動き、最終的には「文学的自殺」を遂げた。本論は、同時代の資料を丹念に読み解きながら当時のピリニャーク評価や文壇における歴史哲学的議論を再構成した上で、この作家の辿った変遷を跡付けている。作風が激しく変遷したこともあって評価が難しく、これまでは革命直後の作品に見られる文体的な実験性に着目されることの多かったピリニャークの包括的理解につながる重要な論考であり、審査委員会は、全員一致で本論文が博士（学術）の学位にふさわしいと判断した。

なお、審査委員会は、前田和泉を主査とし、本学の沼野恭子教授、山口裕之教授、久野量一准教授、外部審査者として野中進・埼玉大学教授によって構成され、最終試験（公開審査）は2017年2月21日に本学において行われた。

【論文の概要】

本論文は、本文（224頁）に参考文献リストを加えた238頁から成る。本文の構成は以下のとおりである。

序論

1. 十月革命とピリニャーク

　1-1. 革命前におけるピリニャークの創作

　1-2. ソ連におけるシュペングラーの歴史哲学受容について

　1-2-1. ソビエト文学と『西洋の没落』

1-2-2. トルストイのシュペングラー・テクスト：亡命をめぐる思惑と駆け引き
1-2-3. 『西洋の没落』、あるいは逆行する歴史の針
2. ロシア文化の源流を求める「スキタイ人」の芸術運動
2-1. 「スキタイ人」としてのピリニャーク
2-2-1. スキタイ主義と十月革命
2-2-2. 始原力とは何か
2-2-3. 内なる東洋をめぐる論争
2-3. アンチ・ペテルブルグ・テクストの誕生
3. ソビエト文明の夜明け前
3-1. 足早に訪れた創作の危機
3-2. 「機械」と「狼」の間で
3-3-1. 革命の終わりと新たな始原力の探求
3-3-2. 始原力の探求と『日本印象記』
3-4-1. 贖罪として書かれた『赤のソルモヴォ』
3-4-2. 「偉大なる転換」とソビエト文明の夜明け
結論

序論において先行研究を概観した後、第 1 章ではピリニャークが創作活動を開始する 1915 年から代表作『裸の年』が発表される 1922 年までの時期を取り扱い、「同伴者作家」と呼ばれたピリニャークの文化的・思想的・政治的背景に迫っている。佐藤氏は、ピリニャークの初期作品に通底する世界観を「始原力」に着目して論じた上で、同時代のソ連でも大きな話題を呼んだシュペングラー『西洋の没落』との相関関係を分析している。後のピリニャーク作品に見られる「機械」（＝西欧的文明）と「狼」（＝始原力）の間の葛藤と比較すると、この時点ではピリニャークは明確に「狼」を自身の世界観の中心に据えている。ピリニャークにとって革命とはロシアの原初的な文化を復権することであり、共産主義ではなく民衆の「始原力」が革命を起こしたのだと彼は理解していた。

第 2 章では、革命期のペトログラードで興ったサークル「スキタイ人」の活動がピリニャークに与えた影響が考察されている。スキタイ主義は革命を支持したとはいえ、政治思想的には反共産主義であったため、ソ連時代には研究が滞っていたが、近年になり再評価が進んでいる。革命期ペトログラードにおける文芸活動の全貌を明らかにする上で重要なそれらの先行研究を踏まえた上で、佐藤氏はスキタイ主義運動がピリニャークに与えた影響を明らかにした。そもそも「始原力」に着目したのはスキタイ主義の作家である。そのため、本論ではまず「始原力」という概念がロシア文化史の中で形成されてきたプロセスを俯瞰し、その象徴性を明確にするとともに、スキタイ主義運動において「始原力」が果たした役割を検証している。その上で佐藤氏は、スキタイ主義の影響を受けたピリニャー

ク作品『酔いどれ提督ピーテル陛下』『サンクト・ピーテル・ブルフ』『裸の年』（これらを佐藤氏は「アンチ・ペテルブルグ・テクスト」と総称する）を分析し、「アジア的なロシア」の探求に乗り出した作家の歴史哲学を考察している。

第3章では1924年から1930年の間に執筆された作品を扱っている。この時期はピリニャークが創作上の危機に陥った時期である。1920年代後半、国家による文化統制が強まる中で書かれた作品を分析することで、佐藤氏はピリニャークの挑戦と葛藤を浮き彫りにしている。1925年に発表された『機械と狼』は、スターリンによって「鋼鉄のロシア」が着々と築き上げられる中で、かつては「狼」を理想としたピリニャークが、一転して「機械」を賛美するべくして書かれた作品だが、一方で「始原力」への憧憬も拭いがたく残されており、作家が「機械」と「狼」の間で葛藤していることが窺える。一方で、文体的には従来の前衛的技法を継続したアンチ・テクスト的手法が駆使されており、そのため「社会主義リアリズム」への傾倒を強めてゆくソ連文壇にあって同作品は数々の否定的な評価を呼び、作家としてのピリニャークの評価を著しく低下させた。「機械」と「狼」の間で振り子のように揺らぐピリニャークの眼差しは、1926年の訪日をきっかけとして日本へと向けられることになる。しかし、スターリンによる赤軍司令官フルンゼの暗殺を示唆した『消せない月の物語』を発表したことにより、ピリニャークは大きな危機を招くこととなる。この政治的過失を償うため、ピリニャークは公式に謝罪し、また体制賛美のルポルタージュ『赤のソルモヴォ』（1928）を執筆し、また長編小説『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』（1930発表）によって「鋼鉄のロシア」が「スキタイ的ロシア」を葬り去る様子を肯定的に描く。しかしそれはロシアのはらむ「始原力」を探求し続けてきたピリニャークにとっては「文学的自殺」に等しいものだった。そしてこの作品が発表されてから8年後の1938年、ピリニャークはトロツキスト及び日本軍のスパイ容疑をかけられ粛清されたのである。

【論文の評価】

ピョートル1世の改革以来、「西」と「東」の文化的パラダイムの中でいかに自らを位置づけるのかという問題は、常にロシア社会にとって大きなテーマであり続けた。東西を内包するロシアは、その中で自らの文化的アイデンティティーを模索することをいわば宿命づけられたのであり、ピリニャークもまたその歴史哲学的系譜を色濃く受け継いでいた。ロシア革命という歴史の大転換は、こうした「西か東か」という文化的アイデンティティーを再考する契機を知識人に与え、熱心な議論を生むこととなった。本論では、シュペングラー受容やスキタイ主義など、当時のコンテクストを掘り起こして分析し、それをピリニャーク理解につなげた点が高く評価される。従来ピリニャークは、とりわけ『裸の年』に見られるような文体的実験性に着目されることが多かったものの、その「実験性」をロシアの思想的文脈の中でいかに位置づけ、評価するかという観点からの研究は重視されてこなかった。当時の文化統制の中で激しく作風が変動したこともあり、文学史的に重要で

ありながらも評価の難しい作家とされてきたピリニャーク（最終的に粛清されたという伝記的経緯も、20世紀後半以降のイデオロギー的転変の中でこの作家を公平に評価することの障害となってきた）の全体像を明らかにし、同時代の社会情勢との相克を浮き彫りにした本論は、ピリニャーク研究に新たな一歩を切り拓くものと言えよう。

その一方で、審査においては次のような指摘もなされた。多くの審査員が挙げたのは、テクスト分析が少ない点である。当時のコンテクストや文壇事情、社会・思想的背景については詳細に記述され、また、第三者的目線からの作品評価はなされているが、ピリニャークの作品それ自体を佐藤氏がいかに読み解き、解釈するかという部分は相対的に物足りない。また、論理構成や章立てについても、本論の論旨を十全に展開するにあたって必ずしも効果的な形になっておらず、結論そのものは充分に説得力を持っているにもかかわらず、それに至るまでの論理的な推進力が弱まってしまったのが惜しまれる。他にも、革命後のピリニャークを論じるにあたって、「国家」と「社会」が漠然と同一視されており、「大衆読者」とは何であるかという定義も明確にされていない、との指摘もあった。細部の記述や解釈に関してやや説得力を欠く箇所もあり、また、引用されたテクストや作品タイトルの翻訳にも若干不正確と思われる例がいくつか見受けられた。

これらの指摘に対して、佐藤氏は一貫して真摯に回答した。テクスト分析の少なさについては、過去の論文ですでに一定の分析を行っていること、また、本論のオリジナリティが最も発揮されているスキタイ主義との関連性を前面に出すためにあえてそのような方針をとったのだという説明がなされた。章構成の甘さは、これまで個別に発表されてきた研究を本論に組み込むにあたって、より全体のバランスを考えて再構成すべきであったとの反省の弁が述べられた。その他の指摘に対しても佐藤氏は充分に自覚していることが随所に窺えた。本論において不十分であった点を踏まえつつ、それを今後の研究へいかにつなげていくかという展望と意欲も、質疑応答の最後で佐藤氏からは示された。

審査の場においては本論に不足すると思われる点についての指摘もあったものの、それはあくまで、さらなる研究の発展へ向けての提言であり、全体としての本論の価値を損なうものではない。本論は、ロシア文学研究はもとより、他地域の文学・文化研究にとっても多くの示唆を与える可能性を持つ労作であることに疑いはない。

以上、本論文の内容と最終試験の結果を総合的に判断して、審査委員は全員一致で上記の結論に達した。

以上。